

日本人と犬

縄文時代中期までの犬の特徴は、体高(肩までの高さ)が38~45cm程度の小型犬で、額と鼻にかけての凹み(額段、またはストップという)があまりなく、ほっそりした顔であったことがわかっています。こうした特徴をもった犬はアジア大陸南部が起源と推定され、約6,000年前には広く東アジア全体で飼育されていたと考えられています。

弥生時代には、渡来人によって稲作と共に新しい特徴をもった犬がもたらされ、ストップがより明瞭になりました。また、弥生人は犬を食用にしており、この風習は以後も続きます。675年の犬食の禁止(『日本書紀』天武天皇四年)や、発掘調査による解体痕のある犬の骨の出土などは犬食があったことを証明しています。また、一方では大切にされ墓に葬られる犬もありました。

江戸時代でも、食用にされた犬の骨が出土するほか、戒名や俗名、命日が記された墓石をもつ犬の墓や、三途の川を渡る渡し賃が副葬された犬も見つかっています。当時の犬は多様な特徴をもっていました。それは中国大陸だけでなく、大小様々な特徴をもった犬が長崎を通じてヨーロッパから持ち込まれた結果で、このような犬は将軍や大名にも献上されました。

中国の犬(狗)に関する故事成語

犬の忠誠心はよく知られていますが、逆に善悪に関係なく仕え、相手に吠えかかることや、身近な存在であるために軽く見られるなど、多くは悪いイメージで使われています。

- ◆ **狡兎死して走狗烹らる** 『韓非子』(戦国時代 約2,300年前)
すばしっこいウサギが死ねば猟犬は不用となり煮て食べられてしまう。
→ 敵が減ぶと重臣は不用となって謀殺されてしまうことのとえ。
- ◆ **狗吠緇衣** 『韓非子』(戦国時代 約2,300年前)
緇衣は黒い服。忠誠心のある犬でも、主人の服の色が変わると吠えてしまう。
→ 人は外見が変わると、内面も変わってしまったことのとえ。
- ◆ **跖の狗、堯に吠ゆ** 『戦国策』(前漢 約2,000年前)
跖という名の盗賊の飼犬は、伝説の聖天子である堯に吠えかかる。
→ 犬は善悪に関係なく主人以外に吠えるが、人は主人のためであっても善悪に関係なく尽くすべきではないという戒め。
- ◆ **狗猪もその余りを食らわず** 『漢書』(後漢 約1,900年前)
→ 犬やイノシシでさえも道に外れた行いをする人の食べ残しは食べない。
- ◆ **犬馬之養** 『論語』(後漢 約1,800年前)
犬馬を養うのと同じように気持ちを込めないで養うこと。
→ ただ養うだけで敬う心の欠けている親孝行のやり方を戒めることば。
- ◆ **狗尾続貂** 『晋書』(唐 約1,700年前)
狗尾は犬のしっぽ。貂はテンの尾で飾った冠で、高位高官の者が着けた。
西晋の趙王が一族の者を高位高官に任用したとき、人々が「今に貂がなくなり、代わりに犬のしっぽを着けるようになるだろう」とののしった。
→ 優れた人物の後につまらない人物が続くことのとえ。

<参考文献>

設楽 博己 2015年『十二支になった動物たちの考古学』新泉社
 大場 磐雄 1996年『十二支と十二獣』美巧社
 来村多加史 2005年『キトラ古墳は語る』生活人新書148 日本放送出版協会
 加藤 迪男 2010年『十二支(えと)のことわざ事典』日本地域社会研究所
 諏訪原 研 2005年『十二支の四字熟語』大修館書店
 鄭 高詠 2005年『中国の十二支動物誌』白帝社

主 催 兵庫県立考古博物館加西分館
 後 援 兵庫県 兵庫県教育委員会

えと 干支 戌 いぬ・ジュツ

平成30年 1月2日 火 ~ 3月13日 火

犬を飼う世帯は全国で18%にのぼり、犬の数は1,200万頭近くにも達するそうです(社団法人ペットフード協会 平成23年度統計)。こうした日本人と犬とのつながりは、約9,000年前の縄文時代には始まっていました。

縄文人は犬を狩りのパートナーとして可愛がり、犬が死ぬと穴を掘ったお墓に丁寧に埋葬しました。これほど長期間にわたって人と身近だった動物は他にいません。

今回のスポット展示では、本年のえとである「戌」にちなんで、中国におけるかんし干支(十干十二支)、十二生肖と、そこに登場する「戌」「犬」と人との関わりについて解説します。

むかし、
「戌」年は
「犬」年では
なかったワン!



疾駆する十二支の犬

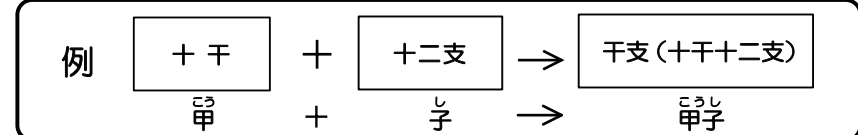
十二支が動物で表されている
(パルメット唐草十二支紋鏡 唐 約1,400年前)

10種類の十干と、12種類の十二支を組み合わせた60種類の十干十二支の表(西暦や元号が使われる以前、年を表すために使われた。60年で一巡するので、「還暦」のことばが生まれた)

通番		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
十干	漢字	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
	音読み	こう	おつ	へい	てい	ぼ	き	こう	しん	じん	き	こう	おつ	へい	てい	ぼ	き	こう	しん	じん	き	こう	おつ	へい	てい	ぼ	き	こう	しん	じん	き	こう	おつ	へい	てい	ぼ	き	こう	しん	じん	き
	訓読み	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと	きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと
		+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

通番		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
十二支 <small>(十二生肖)</small>	漢字	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	
	音読み	し	ちゅう	いん	ぼう	しん	し	ご	び	しん	ゆう	じゅう	がい	し	ちゅう	いん	ぼう	しん	し	ご	び	しん	ゆう	じゅう	がい	し	ちゅう	いん	ぼう	しん	し	ご	び	しん	ゆう	じゅう	がい	し	ちゅう	いん	ぼう	しん	し	ご	び	しん	ゆう	じゅう	がい	
	訓読み	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い	ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い	
		↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

通番		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	
十干十二支(干支)	漢字	甲子	乙丑	丙寅	丁卯	戊辰	己巳	庚午	辛未	壬申	癸酉	甲戌	乙亥	丙子	丁丑	戊寅	己卯	庚辰	辛巳	壬午	癸未	甲申	乙酉	丙戌	丁亥	戊子	己丑	庚寅	辛卯	壬辰	癸巳	甲午	乙未	丙申	丁酉	戊戌	己亥	庚子	辛丑	壬寅	癸卯	甲辰	乙巳	丙午	丁未	戊申	己酉	庚戌	辛亥	壬子	癸丑	甲寅	乙卯	丙辰	丁巳	戊午	己未	庚申	辛酉	壬戌	癸亥	
	音読み	こうし	いっちゅう	へいいん	ていぼう	ぼしん	きご	こうしん	じんご	きび	こうしん	ゆうじゅう	がい	いっちゅう	へいいん	ていぼう	ぼしん	きご	こうしん	じんご	きび	こうしん	ゆうじゅう	がい	いっちゅう	へいいん	ていぼう	ぼしん	きご	こうしん	じんご	きび	こうしん	ゆうじゅう	がい	いっちゅう	へいいん	ていぼう	ぼしん	きご	こうしん	じんご	きび	こうしん	ゆうじゅう	がい	いっちゅう	へいいん	ていぼう	ぼしん	きご	こうしん	じんご	きび	こうしん	ゆうじゅう	がい					
	訓読み	きのえね	きのとうし	ひのえとら	ひのとう	つちのえたつ	つちのとみ	かのえうま	かのひつじ	みずのえさる	みずのととり	きのえいぬ	きのとい	ひのえね	ひのとうし	つちのえとら	つちのとみ	かのえたつ	かのとう	みずのえたつ	みずのとみ	きのえうま	きのととり	ひのえいぬ	ひのとい	つちのえね	つちのとうし	つちのとみ	かのえとら	かのとう	みずのえたつ	みずのとみ	きのえうま	きのととり	ひのえさる	ひのととり	つちのえいぬ	つちのとい	かのえね	かのとうし	かのとみ	きのえたつ	きのとみ	ひのえうま	ひのえとら	つちのえさる	つちのとうし	つちのとみ	かのえとら	かのとう	みずのえさる	みずのとみ	きのえとら	きのとみ	ひのえたつ	ひのとみ	つちのえさる	つちのとうし	つちのとみ	かのえとら	かのとう	みずのえいぬ
		大正13年	大正14年	昭和元年	昭和2年	昭和3年	昭和4年	昭和5年	昭和6年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年	昭和14年	昭和15年	昭和16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年	昭和21年	昭和22年	昭和23年	昭和24年	昭和25年	昭和26年	昭和27年	昭和28年	昭和29年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年	昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年	昭和38年	昭和39年	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	昭和54年	昭和55年	昭和56年	昭和57年	昭和58年	



干支(えと)とは

日本では、「君は何年生まれ?」「私はウマ年だよ」など、生まれた年を表すために、動物の「干支(えと)」が使われます。この干支には「ね、うし、とら、う、たつ、み、うま、ひつじ、さる、とり、いぬ、い」の12種類があり、それぞれ「ねずみ、牛、トラ…」といった動物をイメージし、「ウマ年だったら、お人好しだね」などと言うことがあります。

こうした干支は、いつ、どのようにして始まったのでしょうか。

干支(えと)のはじまり

「えと」の漢字である「干支」は、本来「かんし」と読み、「十干十二支(じっかんじゅうにし)」を省略した言葉です。そこには現在のよな動物の意味は含まれていませんでした。

「十干」は、「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」の10種、「十二支」は、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の12種があります。この十干と十二支を順につなげていくと、60通りの組み合わせ(10と12の最小公倍数)ができます(上の表)。これが「十干十二支」です。中国の商(殷)の時代(約3,500年前)には、この十干十二支を使って60日で1サイクルとなる暦を表していました(遺跡出土の甲骨文字から)。

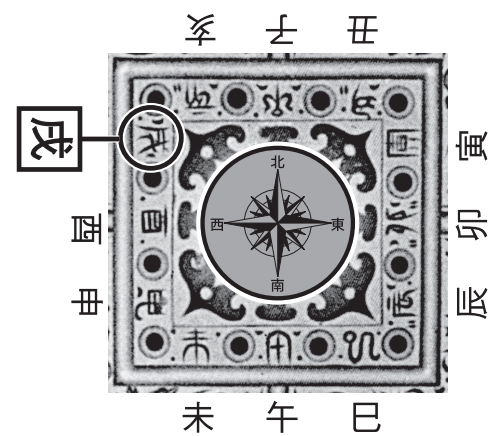
後になってから、方位や年を表すようになり、元号(「昭和」や「平成」など)や西暦が使われるようになるまで、60年で1サイクルとなる暦年を示すようになりました。

ちなみに、甲子園球場は竣工した大正13年が「甲子」の年であったことから名付けられました。

十二支が動物に

本来、十二支の「子・丑・寅…」は日や方位を示すもので、動物の意味を含みません。それが、遅くとも秦の時代(約2,200年前)になると、なぜか動物が割り当てられるようになり(湖北省雲夢県睡虎地十一号秦墓「日書」)、後漢の時代(約1,900年前)には現在と同じ動物にまとまります(王充『論衡』物勢篇)。動物が割り当てられた十二支は「十二生肖(じゅうにしゅう)」と呼ばれています。

これが今の日本でいう12匹の動物からなる「干支(えと)」と同じものです。



各方位に配置された十二支
鏡背面の紋様に方位を与えている
(方格規矩四神鏡 新 約2,000年前)

十二支		十二生肖	
子	し	鼠	ねずみ
丑	ちゅう	牛	うし
寅	いん	虎	とら
卯	ぼう	兎	うさぎ
辰	しん	龍	りゅう
巳	し	蛇	へび
午	ご	馬	うま
未	び	羊	ひつじ
申	しん	猿	さる
酉	ゆう	鳥	とり
戌	じゅう	犬	いぬ
亥	がい	猪(豚)	いのしし(ぶた)